

何とぞ觀文堂講席初り、各にも出席有之様に仕度と申儀に候處、いづれも同心仕、三月四日より開講仕候。四書・六經并杜律・文章軌範を順講仕申候。經義は全く自分の料簡は不相加、幸先年羽黑養濟并室新助殿、御國にて信從の人も多き儀、旁此兩先生の説を承傳罷在候故、是を以て講説仕申候。僅か旬月の間に候所、信從の輩百餘人に滿申候。講日にも七八十人は出席に御座候。松雲公御學問秀申儀にて、御治國久敷候へ共、如此儀は不承候。當御代は御學問の儀、且て御沙汰も無之候所、却て如此御座候。勘解由發起故にては可有之候へ共、畢竟時節到來と存候。はや士風も少々改り申様に相見え申候。就其觀文書堂尊經集と題仕、一書を集申候。信從の内勘解由詩を卷頭に載申候。其外詩文章段々載申事に候。御自分儀は名望も有之儀、其上兩先生の講説を以て講じ候へば、珍重にも可存事候。自他の爲にも候間、人を勸勉の助にも罷成候詩を一首申請、尊經集へ載せ申度候。經の字を韻礎に用相贈候様に仕度、旁罷越候旨申聞候。私挨拶に申入候は、先づ以一段の儀御手柄成事に存候。殊に旬月の間に信從の衆、百餘人に及候と

申儀、如何様の衆に候や、拙子など世間疎々敷故か御物語にて初て承申候。士風の改り申候と被仰聞候事は如何、無心元存じ候。以來左様に罷成候へば珍重成事に候。尊經集被撰候に付、拙作御請候儀忝く存じ候へども、中々不存寄事に候。元來詩文ともに未熟成事。先年韓客と參會の刻などは、不思議に詩情も出申候。近年は別て一句も不成終候。其上舊臘同姓藏人病死の後は、人とも不交、今以詩歌等の心に移り不申候。其内尊經集爲御見候はゞ一覽は仕度候。愚作の儀は思召に難叶存じ候。當地にては大地氏にしくものは無之儀に候。此人へ御請可然存じ候旨申聞候所、成程新八殿へは人次を以て頼遣候所、承知の旨申來候。乍然詩文は未致出來候。先刻も申上候通り、養濟・鳩巢兩先生の説を以て講じ、點は専ら垂加之點を用候へば、大地氏などは珍重にも被存、人をも被勸私方へ罷出候様に可仕事に存じ候所、此間大石慶安せがれ某、私宅へ罷出候筈に御座候處、却て此人拒み被申候て不罷出候。か様の儀は無我に有之度ものと存候旨申聞候。私申聞候は、大石氏實に罷出承度候はゞ、何の仔細も無之儀可罷出事に候。大地兄被拒候故、不

罷出と申譯にては聊有之間敷と存じ候。何とぞ様子も可有之事と存じ候旨申候。齋宮又申候は、講席の作法事の外敷敷、朝廷の禮法よりも嚴に相見え、聽衆皆禮服を着仕申候。是等は皆勘解由殿の發起故と存じ候旨申候。尊經集は追付板行申付候由に御座候。齋宮儀五六年も疎遠にて參會も不仕、舊臘藏人病卒、私不幸の砌など弔にも不罷越、却て當元朝年賀には罷越候族に御座候。然所十七日に罷越右の段々、私心底に一圓珍重にも、尤にも不被存候。仍之右の趣に挨拶仕置候。近頃虚誇にも相聞え、名實共に不相叶事共に御座候。一旦承候へば可稱事の様に御座候得共、似是而非なる類に御座候。其後大地兄へ懸御目相尋候所、成程人次を以て申聞、尊經集へ詩文加入仕度旨申越候へども、一向に辭避仕り、遣不申候。大石某事は今年十五歳に罷成、聊定見も無之書生、殊に慶安頼置、取立申管の筋目の者に付、觀文書堂へ可罷出否と尋候故、定見も無之内こゝかしこと罷出承候へば、惡敷ものに候間、不入ものと存じ候。乍然此方とゞめ申にては無之候。勝手次第と申聞置候旨、御申聞候。

一、右書堂聽衆の内、役人相極置、官號を定め、都講・副都講・執席并申輩有之、歷々の者共相集り候所に御座候。學校の様に覺申かと奉存候。齋宮元來京師の者に御座候。か様の儀私共へさへ誇大張皇仕たる申様に候間、京江戸などへも多分爲名聞申廣め申儀も可有之やと、笑止成事に奉存候。外より御聞不被遊以前に申上置度、近比不益の紙面と奉存候へども、粗如此に御座候。以上。

西五月廿九日

青地禮幹判

新助様

函丈下

一、源氏坊徳川天一事件

享保十四年春夏の交、江戸品川町末に源氏坊徳川天一吉種と名乗候浪人致住居候。上へ御由緒有之旨潜に申立、密に浪人を召抱怪敷事共有之趣、御代官伊奈半左衛門へ迄訴人有之、半左衛門宅へ召寄搦捕候。吉種家來分如左。

家老 赤川大膳  
用人 南部權太夫  
同 本多源左衛門